

二〇一八年度 入学試験問題

法学部A方式II日程・国際文化学部A方式・キャリアデザイン学部A方式

二 限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

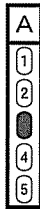
- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。
- 四 問題冊子のページを切り離さないこと。

マークシート解答方法についての注意

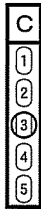
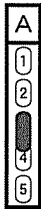
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

ケガレという感覚を呼び起こす現象は、「この世とあの世との狭間という関係性において出現する出来事である」と解せる。この世からあの世へ移行する死という出来事はその最もタンテキな例である。死および死のケガレは「もの」(実体)ではなく「こと」(出来事)である。死のケガレとは、死という未知の他界がこの世へ向かって突出してきたことに驚き、その危機を訴える言葉である。つまり死のケガレはこの世に生をツムぐ者にとつてはあの世という未知なる他界との接触という間の出来事であり、そこに生死を含む関係論的(他界をも含むという意味では宇宙論的であり、生の限界を意識して思考する点では超越論的である)思考を招来させる契機がある。したがって、伝統社会のフオークロアとして伝承されてきたケガレ観念は、生者の人智を超えた他界的な力の存在を認識し感受するという境界性の場を指示してきたのだと了解できる。

ケガレが上記のとおり、他界を含む¹関係論的・宇宙論的な観念であるかぎり、この世の既知の知識で構成する世俗的思考平面での目的論や因果論といった²換喩的・機能論的思考(死者ないし死体といったものに死のケガレの原因を求めるような思考)では追いつかない。そこを超え出た次元の³隠喩的・関係論的思考平面(パラダイム)に立たなければ適切に理解できないはずである。ここで隠喩的というのは、初潮のケガレの場合ならば少女つまり子供の⁴X⁵的⁶死を意味することで実際の生死の境界の隠喩になっているという意味である。実体として部分を機能的に結びつけ説明する考え方から、関係としての諸々の出来事がまさにそのままで関係を体现する死と隠喩的に対応するという見方への跳躍である。もう一度言う⁷と、ケガレは既知の秩序の破壊という関係的出来事の認知である。ケガレは、実体的機能論で考えられる「もの」ではなく、生と死の関係論を基底に持つ「既存秩序の死」という隠喩でないと適切に把握できない「こと」である。

ケガレという名詞表現は現代日本社会の日常で聞くことはほとんどないだろう。不浄という言い方もめつきり使われる機会が減っている。便所を御不浄といったことも若い世代にはもはや無縁である。ケガラワシイという形容詞表現でさえもよほどでないと使われない。他方、逆に物理的な汚さや病原菌を意識させる不潔、不衛生(キタナイ)という言葉の方は、言うか言わ

ないかは別にしても心に浮かぶ言葉としてはインフレを起こしてゐるのではないだろうか。抗菌グッズの氾濫がそれを象徴している。ここに、現代人の思考の傾向と限界を見て取れる。実体的要素の構成による換喩的・機能論的思考のパラダイムに囚われやすく、隠喩的・関係論的思考の言語で語らなければ正確に把握できない事態も機能論的言語でしか語る術すべを持たないのである。しかしながら、先に指摘したように、ケガレはこの現代人が不得意にしまった、まさにこの隠喩的・関係論的思考の次元を要求するのであるから、ことは厄介である。

このケガレ觀念に正確に接近するために、ここで二つの点について確認しておく必要がある。第一点目は、ケガレ(不浄)と不潔(不衛生)とは明らかに異なる次元の觀念であり、区別されるべきであること。インドでも諸々の儀礼を締めくくる直会なおらいの共食は重要である。そのとき人々は床にあぐらをかいて座り、バナナの葉の上に盛られた食事を右手で手食する。そこで一回かぎりで捨ててしまう自然の産物のバナナの葉に盛られた食事をすることは、ケガレの観点からは最も正しく浄なる食事方法である。バナナの葉の浄性はよく洗った清潔なお皿と比較できるものではない。何回も使うお皿はいくら洗つても使用者の属性がもたらすケガレから自由ではないとされる。この清潔さと浄性との差異は、先に述べた思考のパラダイムの差異(換喩的・機能論的思考か、隠喩的・関係論的思考かの差異)を表現しているから、もともと同一平面上では論じられないのである。

南インドのタミル人の調査村で明確に村人が指摘したことに、糞尿のような排泄物はアシングム(醜悪・不潔)ではあるが、けしてアスツタム(不浄)でもティーツトゥ(ケガレ)でもないというのがあった。この相違は、村人の言葉による説明だけではなく、村の生活の中にひとつの有力な証拠を見いだせる。排泄物は呪物として使わないし、使えないのだ。呪術師が使う呪物はティーツトゥなもの(ケガレしたもの)のみである。何が論点かという点、たとえば、ヨゴレた服は石鹼水などで洗えばきれいになるが、ケガレた服の場合には目に見えるシミがあるわけでもなく、なんらかの方法で清めなければそれを断ち切れない(日本では死のケガレを塩で祓はらうのがよく知られているが、インドは火や水からマントラ*までさまざまな清めの技法を発達させている)。ヨゴレが「もの」的であるのに対して、ケガレは「こと」的であるという相違を指摘できる。ケガレはあくまでもその本質において「出来事」なのである。したがって、村人の語る説明言語をたどりながらも、そのみに頼らずケガレという出

来事を描出する行為をみなければならない。

そのことが、確認すべき第二点目に繋がる。すなわち、ケガレに関しては言葉の不在がそのままケガレ現象の喪失や不在と等号では結べないという指摘である。もちろんその場合、社会の合理化につれてかつて存在したケガレ言語が抑圧され語られなくなってくる事態と、もとからケガレに相当する言語を發達させずにきた社会の場合とを区別して考える必要はある。しかしいずれにせよ、この論点のポイントは、ケガレ現象なるものは、言葉の有無だけでは把握できないものであり、むしろ行為の次元まで考慮しなければ把握しきれないところの全人的存在〔秩序の死〕という出来事を恐れる存在に密着した事象であることにある。それゆえに言葉の濃淡あるいは有無といった現象的差異があるのが、そうした差異を超えて諸社会間を貫いて遍在性を問題にできるということになる。

以上のことが、ケガレを論ずる場合には、この隠されやすい言葉とその周辺言語にもこだわりつつ、さらにそれをめぐって生起している行為や出来事まで含めて広く検討する必要を物語っている。このように考えてくると、「ケガレなど過去の遺物だ」とイッシューウできないどころか、現代社会においてもなお、ケガレ現象は注視すべき重要な人間的課題に相違ないのである。

それは、明示的に語られるか否かは別に、人が人を差別排除するときに、他の表現では何か追いつかない、やはりケガレ観念と呼ぶしかないような感情にとられることがあるからだ。そのことを、現代日本社会の文脈でもう少し考えておこう。ケガレだの不浄だのといった、通常忌まわしいとされる言葉は、私たちの身の回りではもはや消失してきた感がある。しかも、そのことは近代化のよい成果であるとも考えられている。しかし、果たして事態はそれほど単純な話であるか。ケガレ観念を論ずることは過去の遺制の無意味で無用な蒸し返しの議論なのだろうか。近年、ソウシキエに際して清めの塩を止める傾向が一部にみられる。その理由として死のケガレなどを問題にするのは死者への冒瀆マウタクであるとする意見もみられたりする。日本の民俗文化が保持してきたケガレ観念とは、そのような底の浅い民俗観念なのだろうか。もしそうだとしたら、なぜかくも長く遵守されてきたのであろう。ケガレ観念が差別意識だけに還元されて終わる類の浅い観念であったとしたら、社会に分裂

を生み出すだけのこのような民俗は共同体の中で長く存続しえなかったのではないか。ということとは、今日否定的観念に閉じ込められているケガレ観念には、その一見の様相に反して、実は死すべき運命の下にいる人間が耐え難き死をいかに受容し乗り越えていくか、そのために人々を結集する力として働く積極的な意味があつたのではないかと、推測させる。

ケガレ観念の研究という差別にかかわる特殊な課題のように聞こえるであろうが、そうではなく、それは自己と他者との関係論、とりわけ現世を生きる者と他界との関係論という人間学的根本問題をその射程に持つ重要な課題なのである。

(関根康正「なぜ現代社会でケガレ観念を問うか」より。文章を一部改変した)

【注】 * フォークロア 民俗。

* 換喩 あるものを表すのに、これと密接な関係のあるもので置き換える比喩法。「二本差し」で武士を、

「金バッジ」で国会議員を表す類。

* 直会 祭事が終わつてのち、参加者一回で飲食する酒宴。

* マントラ ヒンドゥー教の祭祀で唱えられる呪文。

問一 傍線部ア、エのカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

問一 傍線部1「關係論的・宇宙論的な觀念」とあるが、ケガレがこのようなものとしてとらえられるのはなぜか。つきの中から最も適切なものを選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア ケガレとは、自己と他者との関係を、宇宙を含めた広大な視野で考察するべきものであるから。
- イ ケガレとは、生者と他界との関係について、現世を超えた視点で考察するべきものであるから。
- ウ ケガレとは、実体と出来事との關係性を、他界という未知の面から考察するべきものであるから。
- エ ケガレとは、死と秩序の破壊との關係を、認識し感受するものとして考察するべきものだから。
- オ ケガレとは、生者と死者の境界をめぐる關係性において現れるものとして考察するべきものだから。

問三 空欄

X

に当てはまる語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 象徴

イ 個別

ウ 抽象

エ 実体

オ 普遍

問四 傍線部2「現代人の思考の傾向と限界を見て取れる」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 物理的な汚さや不衛生に対する嫌悪感が強く、それらの觀念を指し示す言語がインフレを起しているということ。
- イ ケガラワシイという言葉の意味を知らず、キタナイという言葉でそれを表してしまう人が多くいるということ。
- ウ 不浄を不衛生と同等のものにとらえ、ケガレという觀念を表現する言語を持たない人が多くいるということ。
- エ ケガレという言葉はほとんど使われないのに対して、キタナイという言葉は多くの人に使われるということ。
- オ 不浄という觀念が喪失してしまっただけにもかかわらず、不衛生に関して不寛容である人が多いということ。

問五 傍線部3「二つの点」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 清潔さと浄性の差異は思考のパラダイムの差異であるという点と、ヨゴレとケガレという言葉が「もの」的なものと「こと」的なものとの区別しなければならぬという点。

イ 浄性と不浄を区別しなければならぬという点と、ケガレを意味する行為はそれを表す言葉の有無には関係しないことを理解するべきであるという点。

ウ ヨゴレは清潔さにかかわるがケガレは浄性にかかわるという点と、ケガレという言葉はどの諸社会にも遍在することを認識しなければならないという点。

エ ケガレとヨゴレを明らかに異なる次元の観念にとらえるべきであるという点と、ケガレ現象を言葉で表すか否かは考慮に入れる必要はないという点。

オ 不浄と不衛生とを同一のものとして扱うべきではないという点と、ケガレの観念は言葉とは関係なく行為の次元で考えなければならないという点。

問六 つぎの中から、本文の内容と合致しているものを二つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 隠喩的・関係論的思考平面で考えれば、ケガレは死体というものがもたらす既存秩序の破壊である。

イ インドの人々はお皿をケガレから免れないものと考えているため、直会ではバナナの葉を食器代わりに使う。

ウ 通常忌まわしいとされるケガレや不浄といった言葉は、近代化によってその忌まわしさを消失させてきたといえる。

エ 現代人は換喩的・機能論的思考に囚われており、清めの塩をやめる傾向が一部に見られるのがその代表例である。

オ ケガレ観念は、人間の感情の中に根強く存在し続けており、国や地域を超え、諸社会で遍在的にみられるものである。

問七 筆者が、ケガレ観念を現代社会においてもなお考察すべき課題と考えているのはなぜか。つぎの形式にしたがって、二十五字以上、三十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

ケガレ観念は

と考えられるから。

(二) つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

『舟を編む』(三浦しをんの小説。辞書作りに情熱を注ぐ辞書編纂へんざんに関わる人々が、新しく刊行される中型辞書『大渡海』を完成させるまでの日々を描いた群像劇)をアニメ化するにあたり作りながら僕が描きたかったのは、「持続するエネルギー」だったかもしれない。十数年に及ぶ歳月を、厚さ八〇ミリの一冊の辞書に捧げる辞書編集部じしょへんじぶの姿は、原作を読んだときから僕の胸を打った。彼らの姿にかくありたいと思う自分の姿が重なったというのもあるからだろう。一つのところを目指しておられることなく生きるのは、単調な旋律を飽きずに聴き続けるように実に難しい。何百万にも及ぶ言葉と向き合い、精査し、1粛々と漸進する辞書作りの足取りに心惹かれた。しかしどうだろう、考えてみると僕たちの生活もこの単調な旋律に対する挑戦ではなかったか。代り映えしない毎日の連鎖に一縷いちろうの手応えを求めて足掻あがいているのではないか。そう思ったとき、僕の中でこの作品がとても身近なものに感じられたのだ。同時に、この「持続するエネルギー」がなければ到達できない情景が脳裏うらを掠すめ、それをアニメーションで描いてみたいと思った。

作品を作る際、まずその物語の世界を構築しなければならぬ。『舟を編む』のアニメ化決定を受けて、僕は物語の主人公馬ま縮光しゆくわう也やが住む東京の春日かすがという街を何度も歩いた。最初にロケーション・ハンティングしたのは残暑の頃。晴れた空の下、熱を帯びた風が緑の葉を揺らしていた。坂道が多く、都会の真ん中で古い建物と新しい建物が混在する街。時折感じるその街に流れる歴史の体温と、無造作に破壊と再生を繰り返すシヨベルカーの雑音。そんな中を歩いて、歩いて、また歩きながら馬縮しゆくわうの生活を想像する。彼はどんな道を通って出勤するのか。どんな景色を見ながら物想ぶつおもいに耽ひるのか。彼の目にこの世界はどんな風に映っているのか。

登場人物を通して世界を観察することで、少しずつその物語特有の感情が見えてくる。感情が積み出す「志」が見えてくる。その「志」が作品を知る最初の手掛かりになる。僕が原作に見た「志」は、日々の単調な旋律の根底に自己流の多様性を帯びさせ、たくましく生きる確かな足取りだ。単調を単調たらしめるのは日常の概念に過ぎず、変化の連続の中に僕らの生活はあるとい

う常識に改めて気づかされる。

春日から歩いて三〇分ほどの距離に神保町じんぼうちょうがあり、馬蹄が働く玄武書房はそこに建っている。古本屋が多く軒を並べることも有名な街で、僕は以前近くの大学に通っていたこともあり、ロケハンで久しぶりにこの街を眺めながら当時のことを思い出していた。

東京へ行けばアニメの仕事ができるのではないかという、何ともぼんやりとした期待を抱き、上京することだけを目的に大学に進学した結果、専攻した政治経済はほどほどに、ほとんど毎日神保町の古本屋街をうろろしていた。最初に買ったのは太宰治全集だったと思う。旧字体で読むことを楽しみつ、独特な、内緒話のような太宰の語り口に浸り、キャッチコピーのように鋭い一文に出くわしては興奮していた。太宰の他にも、漱石や鷗外をはじめ、²朔太郎や中也の詩集、寺山修司の不思議な世界にも触れた。中でも特に印象に残り、折に触れ読み返す作家に小林秀雄がいる。

³僕が小林秀雄から学んだのは「考えても考えてもいつも足りない」という思想だ。余計な装飾を削ぎ落とし、芯に残るものは何かを見詰める。対象となる事物と同時に自分自身をも削ぎ落としてゆく。小林秀雄の文章から読者自身も試されているような惻愴れいりな視線を感じて、そこまで物事と対峙たいじしないと本質には辿り着けないという峻厳しゅげんさを教えられたように思う。簡単に判ったような顔をしてはいけない。

だから、原作があるものをアニメ化するときにはとても緊張する。原作者が作品に込めた「志」を見逃していかないかいつも不安だからだ。いくなればこの土台を見誤ると、僕が作品に触れば触れるほどその原作が持つ本質から遠退とっのしてしまう。その不安を少しでも和らげるべく僕は作品の舞台となる街を繰り返し歩くのだと思う。主人公には何が見えているのか、という問題に何度も立ち戻る。

神保町の古本屋の軒先に並ぶ多くの言葉を眺めながら、ふと一つの疑問が浮かんだ。辞書編纂の仕事に関わる人、または向いている人に、言葉はどのように映っているのだろうか。

僕たちアニメーターの仕事は、一秒間を二四コマに分割し、そのコマを絵で埋めてパラパラ漫画の要領で動いているように

見せる仕事だ。その動きを自然に見せるために普段から人や動物、または火や水といった現象にいたるまで色々な「動き」を観察している。こんなことを毎日続けているから、無意識のうちにアニメーター独特の物の見え方が身についているように思う。同じように、辞書作りに関わる人にも独自の言葉の見え方があるように思えた。しかし、その生業が生み出す癖のような視界は、実際にその仕事に関わる人にしか判らない。だから結局のところそれを描こうとしても素人である僕の想像の域を出ないのだが、僕は一例として、作品の中で画面に映る言葉以外の彩度を抑え、言葉が浮かび上がる表現を試みた。なるほど、確かに言葉は特別に見えた。しかしそれだけでは足りない。十数年もの歳月を一冊の辞書に注ぐ人間が、言葉のさらに向こうに見ている情景を想像しなければ、その生業特有の視界を表現したことにはならない。辞書に関わる彼らの内面に浮かぶ情景を知る必要がある。そこには、⁴自分の生涯を一つの信念に懸けられる「持続するエネルギー」の根源があるように思えた。

僕がアニメを作り続ける理由に、世界を変えてみたい、というのがあった。一本の作品との出会いが、誰かのその後の世界の捉え方をガラッと変えてしまうような瞬間に立ち会いたいのである。そういう作品を作りたい。それはまさに中学生だった僕自身の経験であり、そんな作品との出会いが今の自分につながっている。アニメには、空白な時間を埋める玩具的要素もあれば、閉じた内面を打破し次のエニグマ(謎)へ踏み出す一助となる要素もある。そのどちらにもアニメが存在する魅力があるのだが、できれば僕は後者を、希望として描きたい。世の中捨てたもんじゃないと、堂々といえるような出会いを作りたい。これが、アニメを作り続けたいと願う僕の原動力ではないだろうか。中学生の僕が受け取ったバトンを、今度は作り手として次の誰かに渡したい。

では『舟を編む』における主人公馬締の原動力は何か。言葉を沢山知りつつ、相手に気持ち伝えることを不得意とする人間の、精神のどこかしさ。これは馬締だけの特例ではない。多くが共感する葛藤ではないだろうか。自分を表現し伝えるということは、自分を知るというくらい大変難しい問題なのだ。言葉には、たとえメモ書きにせよ感情がこもる。相手に確かな心の内を伝えたくて言葉を選ぶ。しかしそれだけでは成り立たない。翻って、受け取る側も同じくその言葉の意味を知らなければならぬ。言葉の奥底に潜む真意を読み取らなければならぬ。「相互理解」によって初めて精神のやりとりは成立するのだ。

馬締が渴望したのはこの「相互理解」ではなかったか。辞書がそのためにあるのだとしたら、馬締の原動力はここにある。

茫漠と広がる海を前に佇む独りの男。吹き荒ぶ風。形を変えて打ち寄せる波には無数の言葉。遠く、薄黄色の空の下には「持続するエネルギー」の象徴として観覧車のシルエツト。ゆつくりだが止まらない。こんな情景が僕の中に浮かんだ。

僕はこの作品を通して「作る」ということを何度も考えさせられた。アニメや辞書に限らず僕たちの周りは沢山の物で溢れている。その一つ一つに関わった人たちの苦闘の日々があると思うと、何にでも感謝する訳ではないが、受け取る側にとって恵まれた環境を感じずにはいられない。大量消費社会といわれる中で今一度受け手として見つめ直すべきは、それら一つ一つの使い方ではないだろうか。生活必需品も書物も映像も、皆同等に自分を漸進させるための「道具」なのだ。身を委ねる物ではない。それら「道具」を使って自分はどうかありたいのかが問題なのだ。かくありたい自分の姿を研ぎ澄ますことで「道具」の真贋⁵が見えてくる。それを受けて僕たち作り手は、より本物に近づく努力を繰り返す。これが作り手と受け手による「相互理解」の一つの形ではないだろうか。

いずれにせよ、それが作り手であれ受け手であれ、長い歳月をかけ幾度も到達点へ向けて挑み続けるには「志」が必要だ。「志」は時として集団に身を置くことを許さない。だが、「志」を持つ人間の精神は、徒党を組まずいつも独りで風の中を歩く、凜とした姿を思わせる。自由なのだ。そして僕は、これら信念に向かい歩みを止めない姿、原動力を「志独歩」と呼びたい。

(黒柳トシマサ「志独歩」より。文章を一部改変した)

問一 傍線部1「漸進する」の本文中の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 困難を打破していく イ ゆっくり歩み続ける ウ 新しい趣向を探し求める
エ あきらめずに戦う オ 力強く立ち向かっていく

問二 傍線部2「朔太郎や中也の詩集」について、①萩原朔太郎と②中原中也の詩集の題名をつぎの中からそれぞれ一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

① 萩原朔太郎

- ア 月に吠える イ 智恵子抄 ウ 春琴抄 エ 二十億光年の孤独 オ みだれ髪

② 中原中也

- ア 若菜集 イ 一握の砂 ウ 夜明け前 エ 在りし日の歌 オ 抒情小曲集

問三 傍線部3「僕が小林秀雄から学んだのは「考えても考えてもいつも足りない」という思想だ」とあるが、学んだ思想を实践した筆者の行為として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア アニメーターになる意志を抱きながら、神保町の古本屋街を歩き、書物を探し回る。
イ 日常生活において人の動作や火のゆらめき方等を常に観察し、その動きを分割化して記憶する。
ウ 小説の主人公が住む春日という街を何度も歩き、主人公の視点で街を眺め、その生活を想像する。
エ 中学生の時に観たアニメーションのように、人に希望を与えられる作品を作り続けることを目指す。
オ アニメーションの画面上で、言葉が浮かび上がる手法を用い、辞書編纂に携わる人の言葉の見え方を表現する。

問四 傍線部4「自分の生涯を一つの信念に懸けられる」「持続するエネルギー」の根源があるように思えた」とあるが、筆者がそのように思うに至ったのはなぜか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 筆者は、辞書作りに情熱を注ぐ小説の中の人物たちに魅力を感じており、その人物造型にはどのような工夫が凝らされているのかを的確に認識し、それを表現し続けていくことこそがアニメーターの義務だという思いがあったから。

イ 言葉を多く知りながらもうまく使いこなすことができない馬締光也のことを筆者はもどかしく感じており、そうした不安定な性質を抱えた人物を主人公とするこの小説をどのように理解すればいいのか、悩み続けていたから。

ウ 筆者は、「舟を編む」の原作者がこの作品に込めた「志」を読み解けたと考えていたが、アニメーション化するにあたり、それを表すための「動き」が不自然であることに気づいたため、より適切な表現を見出そうと思ったから。

エ 筆者は、小説の登場人物と自らを重ね合わせることで物語を深く理解しようとしており、辞書作りに対する登場人物の姿勢にも、自分がアニメを作り続ける情熱の根底にある原動力と通じるものが存在するのではないかと考えたから。

オ 筆者は、ものを「作る」ことについて以前から熟考しており、作り手は受け手に対し、絶えず努力をするべきだという信念を持っているので、この小説の原作者はどんな努力をしているか読み解く必要があると感じたから。

問五 傍線部5「道具」の真贋」とあるが、筆者が考える「真」の「道具」に該当するものをつぎの中から二つを選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 都会の真ん中で破壊と再生を繰り返すシヨベルカー

イ 筆者が学生時代に読み、その思想に影響を受けた小林秀雄の文章

ウ ものの動きを自然に見せるよう考えられた、アニメーションの各コマのアイディア

エ 辞書編纂に携わる人とアニメーターとで異なる、それぞれの生業特有の視界

オ 視聴者の世界の捉え方を変え得るアニメーション

カ 相手に、自分の確かな心の内を伝えたくて選んだ言葉

問六 二重傍線部「こんな情景」とあるが、筆者の頭に浮かんだこの情景は馬締光也のどのような生き方を表現しているか。四十字以上、五十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

昔、比叡の山に、なにがしとかやいひける人のもとに使はれける中間僧ありけり。主のために一事も違ふ振舞ひなし。いみじく真心にて、いとほしき者にぞ思はれたりける。

かかるほどに、年ごろ経て後、夕暮れには必ず失せて、つとめて疾く出で来る事をしけり。主もいみじくにくき事に思ひて、「坂本に行き下るにこそあめれ」など思ひけり。かへりたる時も、うちしめりて、人にはかばかしく面などあはする事もなし。常には涙ぐみてのみ見えければ、「行きかふ所の事を飽き足らず思ひて、かかるにこそ」とぞ、ゆるぎなく主も人も思ひ定めける。

さて、ある時、人を付けて見せければ、西坂本を下りて、蓮台野にぞ行きにける。この使ひ、「あやしく。何わざぞ」と見ければ、あちこち分け過ぎて、いひ知らずいまいましく爛れたる死人のそばに居て、目を閉ぢ、目を開きして、たびたびかやうにしつつ、声も惜しまずぞ泣きける。夜もすがらかやうにして、鐘も打つほどになりぬれば、涙おしのごひてなんかへりける。この使ひ、思はずに悲しく覚えて、思ふらん心のほどは知らねども、涙を流す事限りなし。

さてかへり来ぬ。「いかに」と尋ぬれば、「その事に侍り。この人、あやしくつゆ深くしほれけるは、理にぞ侍るべき。かうかうの事の侍りて、はや失せるなるべし。いみじき聖の行なひを、みだりにあやしのさまに思ひ汚しける罪のほども逃れがたく、悲しくて」といひけり。あるじ驚きて、其後はいみじき敬ひを致して、さらに常の人に振舞ひくらはず。

天台大師の次第禪門といふ文に、「愚かならん者、塚のほとりに行きて、爛れ腐りたらん死人を見れば、観念成就しやすし」と侍るめれば、この人もさやうに侍りけるにこそ。

〔閑居友〕より。文章を一部改変した。

【注】

* 中間僧

雑用を勤める地位の低い僧。

* 坂本

比叡山の東麓。現在の滋賀県大津市の地名。

* 行きかふ所の事

通っている女のこと。

* 蓮台野

現在の京都市北区の地名。墓地、火葬場として知られた。

* 思ふらん心のほどは知らねども

『大和物語』一三三段所収の歌「思ふらん心のうちは知らねども泣くを見るこそ

わびしかりけれ」を踏まえる。

* 天台大師

六世紀の中国の僧、天台大師智顛^{ちぎ}。

* 次第禪門

智顛の著。

* 観念

仏や浄土に心を集中すること。

問一 二重傍線部「かかる」の内容として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 主人に忠実に仕えていること

イ 坂本へ毎晩出かけていること

ウ 早朝には必ず出仕していること

エ すれ違う人の前では顔を隠していること

オ 帰宅時にはいつも涙ぐんでいること

問二 波線部 A「行き」B「思ふ」の動作の主体として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。
ただし、同じ記号をくり返し選んでもかまわない。

- ア なにがしとかやいひける人 イ 中間僧 ウ 主 エ 使ひ オ 死人

問三 傍線部①「いまいましく」②「あやしく」の本文中の意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

① 「いまいましく」

- ア にくらしく イ 嘆かわしく ウ 腹立たしく エ いまわしく オ みすほらしく

② 「あやしく」

- ア 珍しく イ いぶかしく ウ いやしく エ うやうやしく オ 見苦しく

問四 傍線部X「なりぬれば」Y「来ぬ」の文法的説明として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

X 「なりぬれば」

- ア 動詞「鳴る」の連用形＋完了の助動詞の已然形＋順接確定条件の接続助詞
 - イ 動詞「鳴る」の連用形＋完了の助動詞の已然形＋順接仮定条件の接続助詞
 - ウ 動詞「鳴る」の連用形＋打消の助動詞の連体形＋順接仮定条件の接続助詞
 - エ 動詞「成る」の連用形＋完了の助動詞の已然形＋順接確定条件の接続助詞
 - オ 動詞「成る」の連用形＋打消の助動詞の連体形＋順接確定条件の接続助詞
 - カ 動詞「成る」の連用形＋打消の助動詞の連体形＋順接仮定条件の接続助詞
- Y 「来ぬ」
- ア 動詞の連用形＋完了の助動詞の終止形
 - イ 動詞の連用形＋完了の助動詞の連体形
 - ウ 動詞の連用形＋打消の助動詞の連体形
 - エ 動詞の未然形＋完了の助動詞の終止形
 - オ 動詞の未然形＋打消の助動詞の終止形
 - カ 動詞の未然形＋打消の助動詞の連体形

問五 二重傍線部2「罪」とあるが、それはどのような「罪」か。つぎの形式にしたがつて、二十字以上、三十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

という罪

問六 つぎの中から、本文の内容と合致しているものをつ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 比叡山に住む中間僧は、人に会うために夜な夜な坂本に出かけていた。
- イ 中間僧が帰るといつも涙ぐんでいる様子だったため、周りの人々は深く心配した。
- ウ 中間僧の跡をつけた使の者は、その僧が一晩中、死体の傍らで涙を流すのを目撃した。
- エ 死体が散乱する悲惨な光景を目にした使の者は、ただ恐れおののくばかりであった。
- オ 中間僧が鐘を打って死者を供養していることを知った主人は、以後、その僧を深く敬うようになった。

